

# 言語使用面から見た日源新詞の受容 － 定着度調査を中心として－

張 曉娜

## Acceptance of *Riyuanxinci* among Chinese people — Based on the survey of the degree of the acceptance of new loanwords from Japanese to Chinese —

ZHANG, Xiaona

### Abstract

Since the implementation of China's "Reform and Opening up" policy in 1978, loanwords imported from Japanese, such as “御宅族” (Otaku), “萌” (Moe), etc. have been called “日源新詞 (*Riyuanxinci*)”.

A survey was conducted in three regions (three cities) of China in 2018 to see how new loanwords are spreading into social groups. The degree of acceptance of 45 *Riyuanxinci* were considered by examining the correlation between the acceptance of *Riyuanxinci* and the social categories of *Riyuanxinci* users such as region, age, etc. In addition, referring to the results of the survey conducted in 2015 (Zhang, 2018) for the acceptance of *Riyuanxinci* collected from other sources, a more comprehensive picture of the process of spread of new words in Chinese society.

The results of the analysis indicate that 45 *Riyuanxinci* were accepted to some extent, but many of them are still not well-accepted, and it is not yet clear whether these words will be established or not in future. As for the relationship between the acceptance of *Riyuanxinci* and the social categories of *Riyuanxinci* users, region and age influence the acceptance of *Riyuanxinci*. This result shows that the larger the city scale is, the more young people accept *Riyuanxinci*. Especially, among the respondents, 10's to 30's in Shanghai accepted *Riyuanxinci* most in this survey. Furthermore, each word showed various degree of acceptance depending on the social categories of respondents.

This paper also compares the results of the 2018 survey with that in 2015. Three differences were observed: ① the average degree of acceptance was lower than the previous survey, ② The influence of education was not found, ③ the difference of the acceptance degree among each age group was larger in the 2018 survey. This would be due to the fact that the period after the import is shorter and many of them are subculture-related for the words of the 2018 survey.

**Keywords :** *Riyuanxinci*, loanwords from Japanese to Chinese, degree of acceptance, the acceptance of loanwords

### 要旨

“御宅族” (オタク), “萌” (萌え) 等のように, 1978年の中国の「改革開放」政策が実施されて以来, 中国語に取り入れられた日本語由来の外来語は「日源新詞」と呼ばれている。

本稿では, 筆者が収集した295語の日源新詞から45語を抽出し, これらの調査語の受容実態を把握するために定着度調査を行った。その結果から, 語彙の定着度と地域, 年齢などの日源新詞使用者の社会的属性との関連をとらえ, 日源新詞の受容状況を考察した。また筆者は, 2015年にも日源

新詞の受容に関する調査を行っているが(張 2018)、本稿は2018年に行った調査に基づく。2015年の調査結果と比較し、2つの調査の異同の確認とその原因についても考察する。その結果から、日源新詞の社会内での受容の実態を把握する。

分析の結果、調査語45語はある程度認知されているが、知名度の低い語がまだ数多く存在し、これから定着に至るかどうかは不明という段階に定着していることがわかった。また、回答者の社会的属性との関連を分析した結果、地域、年齢が日源新詞の受容に影響することがわかった。つまり、居住する都市の規模が大きく、若い人の方がより日源新詞を受容していると解釈できる。調査回答者のうちに、シャンハイの10代~30代の回答者グループが、今回の定着度調査では日源新詞を最も受容しているグループであることがわかった。さらに、各語の定着度を回答者の属性との関連を分析した結果、その定着は回答者の各属性によりばらつきが見られた。

さらに、本稿は2018年の調査結果と2015年の第1回目の調査結果と比較した結果、今回の調査は2015年調査に比べて、①平均定着度が前回より低い、②学歴の影響が見られない、③各年齢層の平均定着度の差が大きい、の3つの違いが見られた。それは調査語の輸入後の期間が短いことや調査語にはサブカルチャー関係の語彙が多いことなどの要因だと考えられる。

キーワード：日源新詞 日本語由来の外来語 定着度 外来語の受容

## 1. はじめに

“御宅族”(オタク)、“萌”(萌え)等のように、1978年の中国の「改革開放」政策が実施されて以来、中国語に取り入れられた日本語由来の外来語は「日源新詞」と呼ばれている。

本稿は、筆者が新詞辞書、先行研究ならびにインターネットなどで収集した295の日源新詞から45の調査語を抽出し、質問紙調査の結果から語彙の定着度と地域、年齢などの日源新詞使用者の社会的属性との関連をとらえ、日源新詞の受容状況を考察する。

筆者は、2015年にも日源新詞の受容に関する調査を行っているが(張 2018)、本稿は2018年に行った2回目の調査に基づく。調査の方法は2015年の調査と同じだが、今回新たに収集した45語の日源新詞の定着の様子を、地域差、年齢差などとの関わりから確認し、受容されやすい/受容されにくい語の性質などをとらえる。さらに、第1回目の調査結果と比較し、2つの調査の異同の確認とその原因についても考察する。その結果から、日源新詞の社会内での受容の実態を把握する。

## 2. 調査概要

### 2.1 定着度をとらえる方法

本調査は、2015年に中国の3都市(シャンハイ、サイナン、タンジョウ)で行った調査(張 2018)と同じ手法による。本稿で参照した実態調査は次の3つである。

- ①文化庁(2003)の「平成14年度 国語に関する世論調査」の「カタカナ語」についての定着度調査
- ②国立国語研究所(2006)の平成15年~18年「外来語」言い換え提案
- ③梁敏鎬(2007)の日本と韓国の外来語に関する受容度調査

これらの3つの調査を参照して、外来語の定着の程度を「未知」（その語を見たり聞いたりしたことがない）、「認知」（その語を見たり聞いたりしたことがある）、「理解」（その語の意味がわかる）、「使用」（その語を使用する）の4段階で表し、その4段階を連続尺度だと見なしで点数化した。詳しい説明は（張 2018）を参照されたい。

## 2.2 調査語

2015年に行った第1回目の定着度調査の調査語は譙燕等（2011）の『日源新詞研究』を研究対象としたが、中国語においては「外来語」、「新詞」などの概念の意味範囲が定まっていないこと（史有为 2000, 沈国威 1994）、「日源新詞」だけでなく「日本語由来の外来語」に特化した辞書は1つもないこと、くわえて語彙の収集は、多くの場合各研究者が単独で行っており、そのため日源新詞を判断する基準がしばしば研究者により異なること（謝静怡 2012, 彭広陸 2005）、などの問題がある。これらの問題をふまえて、本研究は日源新詞の定義を明確にし、分析対象の語彙を第1に新詞辞書、第2に日源新詞に関する先行研究、第3にインターネットやテレビなどのメディアの3つから抽出し、合計295語を集めた。その内訳は、音訳語60語、逐訳語11語、借形語203語、接辞21語である。

予備調査で274<sup>1</sup>語の定着度を調べ、その結果を元に、高定着度の語（3～4点）、中定着度の語（2～3点）、そして低定着度の語（1～2点）の3つに分けた。その上で、3グループからランダムで15語ずつ選び出した。語を抽出する際には、抽出語全体における音訳語、逐訳語、借形語の各比率とほぼ等しくなるように、ランダム抽出を何回か繰り返し、その結果表1に示す語を調査語とした。

表1 調査語一覧

计划通（計画通り）	爆买（爆買い）	大赏（大賞）
kuso（くそ）	工口（エロ）	量販（量販）
乙男（乙男）	人間失格（人間失格）	本命（本命）
泥鰍内阁（どじょう内閣）	亚撒西（優しい）	福袋（福袋）
箱推（箱推し）	花火大会（花火大会）	美肌（美肌）
奥姆真理教 （オウム真理教）	ORZ/ 失意体前屈 （ORZ/ 失意体前屈）	熟女（熟女）
年功序列（年功序列）	都市传说（都市伝説）	卡哇伊（かわいい）
孤族（孤族）	援助交际（援助交際）	便当（弁当）
色气（色気）	手作（手作り）	打 call（コール）
飞特（フリーター）	肉食女（肉食女）	卖点（セールスポイント）
土下座（土下座）	抖 S（ド S）	中二病（中二病）
KY（KY）	女子力（女子力）	弹幕（弹幕）
Wota 艺（オタ芸）	残念（残念）	暴走（暴走）
干物女（干物女）	BL（BL）	亚美蝶 / 雅蠅蝶（やめて）
玉子烧（玉子焼き）	现充（リア充）	天然呆（天然ボケ）

1 21語の接辞は語ではないため、予備調査時に取り除いた。

## 2.3 分析の手順（張 2018）

調査は質問紙により回答を求めた。質問では、45語の日源新詞を回答者たちがどのように受容しているかをたずねた。それぞれの語に対する回答は、以下の4つから1つだけを選ぶよう求めた。

- ・ 質問にあげた日源新詞を聞いたことがない（以下「未知」）
- ・ 質問にあげた日源新詞を聞いたことがあるが、意味はわからない（以下「認知」）
- ・ 質問にあげた日源新詞の意味はわかるが、使わない（以下「理解」）
- ・ 質問にあげた日源新詞を使う（以下「使用」）

この4段階の定着度（未知、認知、理解、使用）<sup>2</sup>にそれぞれ1点、2点、3点、4点の点数を与えた。未知、認知、理解、使用は実際にはそれぞれ異なる現象であるが、ここでは語の定着度を示すものと見なした。そうすることで、調査語ごとおよび調査回答者ごとの傾向を数値で示すことができるようになる。

分析手順は次のとおりである。まず調査回答者全体と個人それぞれの平均得点を算出し、調査回答者の受容状況を属性別に見る。つぎに調査語ごとに各語の認知率<sup>3</sup>（聞いたことがある割合）、理解率（意味がわかる割合）、使用率（使う割合）そして平均定着度を算出して各語の定着の具合を確認し、回答者の社会的属性との関連を考察した。

## 2.4 調査対象者

回答者は、規模の異なる3つの都市（シャンハイ、サイナン、タンジョウ）<sup>4</sup>で、各都市100名程度（10代、20代、30代、40代、50代以上の5つの世代20人ずつ、男女同数）を層別抽出で選んだ<sup>5</sup>。

- ・ 母集団：上海市（シャンハイ）                      これらの3つの地域の満14才以上の男女  
                  山東省 済南市（サイナン）  
                  山東省 臨沂市（リンギ） 鄒城県（タンジョウ）
- ・ 標本数：300人（うち300人分回収 回収率100%）
- ・ 抽出方法：性別、年齢層別で層別抽出

## 2.5 調査期間・場所および調査法

調査は2018年4月から5月に、筆者自身および知人を通して行った。質問紙への回答は、下

2 4つの回答は順序尺度であるが、その間隔に意味があると認めて、連続尺度と見なす。

3 「認知率」、「理解率」、「使用率」は以下のように求めた。「認知率」は「認知」+「理解」+「使用」、「理解率」は「理解」+「使用」、「使用率」は「使用」を選んだ割合の合計である。

4 都市の規模として、シャンハイは「超大都市」、サイナンは「大都市」、タンジョウは「小都市」である。都市規模の分類基準や各都市の人口数などの詳しいことは（張 2018）を参照されたい。

5 調査対象の選定は筆者が街中で年齢、性別などを注意しながら調査対象を選んだので、有意サンプリングだと見なすべきだと考えられる。

記のような地元の人々が集まる場所で質問紙を渡し、配布時にその場で回答を求める形で得た。

- ・期間：2018年4月～5月
- ・場所：デパート、学校、病院、役所など

## 2.6 回答者の属性

地域、性別、年齢、学歴による回答者の分類は以下の通りである。

表2 各属性による回答者の分類

都市		性別		年齢		学歴	
タンジョウ	100	男性	150	10代	60	中学校 / 以下	35
サイナン	100	女性	150	20代	60	高校 / 高専	56
シャンハイ	100			30代	60	大学 / 短大	180
				40代	60	大学院	29
				50代 / 以上	60		
合計	300	合計	300	合計	300	合計	300

回答者の選定は地域、性別、年齢による層別抽出で行ったため、3地域の回答者はそれぞれ100人であり、性別も150人ずつで男女同数である。年齢に関しては、「10代」から「50代及びそれ以上」の5つの段階の人数はそれぞれ60人であり、学歴に関しては、「中学校及びそれ以下」が35人、「高校及び高専」が56人、「大学及び短大」が180人、「大学院」が29人である。

## 3. 調査の結果

### 3.1 調査回答者属性による分析

調査回答者全体の定着度の平均得点は1.91点である。つまり、45語の日源新詞は、「未知」、「認知」、「理解」、「使用」の4段階のうち、「未知」から「認知」の程度に定着していると思われる。

以下、調査語の定着状況を地域、性別、年齢、学歴との関連で見る。

#### 〔地域〕

タンジョウ、サイナン、シャンハイの3つの地域の平均定着度はそれぞれ1.62, 1.87, 2.23であり、都市の規模が大きいくほど、日源新詞の平均定着度が高くなる傾向がみられる。

3つの地域の定着度を比較するために分散分析を行った。その結果、地域の主効果が認められた ( $F(2, 297) = 36.988, p < .01$ )。HSD法による多重比較の結果、タンジョウの定着度はサイナン ( $p < .01$ )、そしてシャンハイ ( $p < .01$ ) の定着度に対し、有意に低いことが認められた。また、シャンハイに比べると、サイナンの平均値のほうが有意に低いことがわかった ( $p < .01$ )。

表3 地域による平均定着度の分散分析の結果

地域	<i>N</i>	平均値	標準偏差	<i>F</i>
タンジョウ	100	1.62	0.41	36.988
サイナン	100	1.88	0.50	
シャンハイ	100	2.23	0.58	
<i>p</i> < .001				

## 〔性別〕

男性と女性の平均定着度はそれぞれ1.95,1.87であり、男性の点数のほうがやや高い。両グループの平均定着度を比較するために、*t* 検定を行った。その結果、有意な差は見られなかった (*t*(298) = 1.280, *p* = 0.938)。

表4 性別による平均定着度の *t* 検定の結果

性別	<i>N</i>	平均	標準偏差	<i>t</i>
男性	194	1.95	0.56	1.280
女性	211	1.87	0.56	

*n. s.*

## 〔年齢〕

5つの年齢層の平均定着度は、それぞれ10代 (2.05)、20代 (2.18)、30代 (2.08)、40代 (1.75)、50代及びそれ以上 (1.49) である。この結果を見ると、10代を除けば、20代をピークに年齢が増すにつれて平均定着度が下降する傾向があると言える。

年齢層別の平均定着度を比較するために、分散分析を行った。その結果は、年齢の主効果が認められた ( $F(4, 295) = 19.659$ , *p* < .001)。HSD 法による多重比較の結果、10代の平均定着度は40代 (*p* < .01)、50代及びそれ以上 (*p* < .001) の平均定着度に対し、有意に高いことが認められた。また、20代の平均定着度は40代 (*p* < .001)、50代及びそれ以上 (*p* < .001)、30代は40代 (*p* < .01)、50代及びそれ以上 (*p* < .001)、40代は50代及びそれ以上 (*p* < .05) の平均定着度に対し、有意に高いことが認められた。

表5 年齢層による平均定着度の分散分析の結果

年齢層	<i>N</i>	平均値	標準偏差	<i>F</i>
10代	60	2.05	0.60	19.659
20代	60	2.18	0.53	
30代	60	2.08	0.63	
40代	60	1.75	0.36	
50代及びそれ以上	60	1.49	0.28	
<i>p</i> < .001				

〔学歴〕

学歴では、「中学校及びそれ以下」(2.07)と「高校及び高専」(1.82)は回答者全体の平均定着度以下で、「大学及び短大」(1.89)と「大学院」(2.04)は平均定着度と以上である。学歴による定着度を分散分析で比較すると、 $F(3, 296) = 2.198$ ,  $p < .10$ という結果だった。HSD 法による多重比較の結果、各グループ間に有意な結果は見られなかった。

表6 学歴による平均定着度の分散分析の結果

学歴	<i>N</i>	平均値	標準偏差	<i>F</i>
中学校 / それ以下	35	2.07	0.66	2.198
高校 / 高専	56	1.82	0.50	
大学 / 短大	180	1.89	0.56	
大学院	29	2.04	0.46	
<i>p</i> < .10				

以上、調査語の定着状況とそれぞれの属性との関連をみてきた。4つの属性のうち、地域、年齢が日源新詞の受容に影響することがわかった。さらに、平均定着度により強い影響を与えている要因を確かめるために、平均定着度を従属変数、地域、年齢、および地域と年齢の交互作用を独立変数としてSPSSの一般化線形モデルによる回帰分析を行った。その結果、地域 \* 年齢の交互作用 ( $p < .01$ )が見られたため、単純主効果検定を行った。表8と表9がその結果である。

表7 各属性が平均定着度に与える効果（一般化線形モデルによる）

	Wald カイ 2 乗	自由度	有意確率
地域	105.648	2	.000
性別	3.008	1	.083
年齢	107.875	4	.000
学歴	.772	3	.856
地域 * 年齢	20.710	8	.008

表8 単純主効果検定結果1（地域 \* 年齢）

	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
地域	18.573	2	9.286	51.487	.000
年齢	19.603	4	4.901	27.171	.000
地域 * 年齢	3.560	8	.445	2.467	.013
誤差	51.404	285	.180		
総和	1188.342	300			
a. R2 乗 = .448 (調整済み R2 乗 = .421)					

表9 単純主効果検定の結果2（地域＊年齢）

地域	年齢	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	その後の検定
	10代	9.638	2	4.819	26.719	.000	タンジョウ<サイナン<シャンハイ
	20代	2.563	2	1.281	7.105	.001	タンジョウ<シャンハイ
	30代	6.440	2	3.220	17.852	.000	タンジョウ<シャンハイ サイナン<シャンハイ
	40代	2.699	2	1.350	7.482	.001	タンジョウ<サイナン タンジョウ<シャンハイ
	50代 / 以上	.793	2	.397	2.199	.113	
年齢	地域	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	その後の検定
	タンジョウ	4.211	4	1.053	5.836	.000	20代>40代, 20代>50代, 30代>40代, 30代>50代,
	サイナン	5.462	4	1.365	7.570	.000	10代>50代, 20代>50代, 30代>50代,
	シャンハイ	13.491	4	3.373	18.699	.000	10代>40代, 10代>50代, 20代>40代, 20代>50代, 30代>40代, 30代>50代,
誤差		51.404	285	.180			

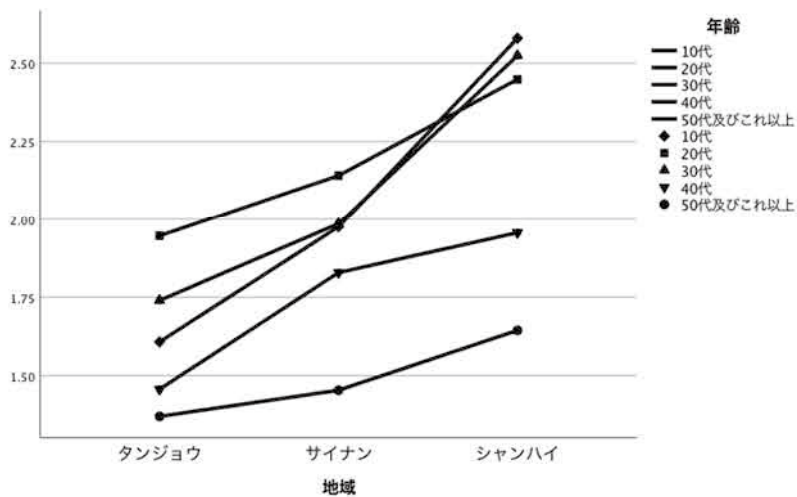


図1 地域と年齢別による平均定着度

表8に見られるように、地域の主効果、年齢主効果が有意であった ( $F(2, 285) = 51.487, p < 0.01$ ,  $F(4, 285) = 27.171, p < 0.01$ )。また、交互作用が有意であった ( $F(8, 285) = 2.467, p < 0.05$ )。つまり、平均定着度に対する地域と年齢の効果は一様ではない。

表9と図1に示したように、地域によって、各年齢層の平均定着度は異なる。具体的には、10代において、タンジョウの定着度はサイナン ( $p < .05$ )、シャンハイ ( $p < .001$ ) の定着度に対し、有意に低いことが認められた。また、シャンハイに比べると、サイナンの平均値のほ



うが有意に低いことがわかった ( $p < .001$ )。20代においては、タンジョウの定着度はシャンハイ ( $p < .01$ ) の定着度に対し、有意に低いことが認められた。30代においては、タンジョウの定着度はシャンハイ ( $p < .001$ )、サイナンの定着度はシャンハイ ( $p < .001$ ) の定着度に対して有意に低いことが認められた。40代においては、タンジョウの定着度はサイナン ( $p < .05$ )、シャンハイ ( $p < .01$ ) の定着度に対し、有意に低いことが認められた。まとめると、各年齢層において、都市の規模が大きいほど、日源新詞の平均定着度が高くなる傾向がみられる。

年齢によっても、地域の平均定着度への影響が異なる。具体的に、タンジョウにおいては、20代の平均定着度は40代 ( $p < .01$ )、50代及びそれ以上 ( $p < .001$ ) の平均定着度に対し、有意に高いことが認められた。サイナンでは、10代の平均定着度は50代及びそれ以上 ( $p < .01$ )、20代の平均定着度は50代及びそれ以上 ( $p < .001$ )、30代は50代及びそれ以上 ( $p < .01$ ) の平均定着度に対し、有意に高いことが認められた。シャンハイにおいては、10代の平均定着度は40代 ( $p < .001$ )、50代及びそれ以上 ( $p < .001$ ) の平均定着度に対し、有意に高いことが認められた。また、20代の平均定着度は40代 ( $p < .01$ )、50代及びそれ以上 ( $p < .001$ )、30代は40代 ( $p < .001$ )、50代及びそれ以上 ( $p < .001$ ) の平均定着度に対し、有意に高いことが認められた。まとめると、各地域では、年齢が増すにつれて平均定着度が下降する傾向がある。また、表9と図1を合わせて見ると、大都市であるシャンハイの「10代～30代」グループと「40代およびそれ以上」グループの間には顕著な差が見られる。

表10と図2～3は2015年の第1回定着度調査と今回の調査の各地域の年齢層ごとの平均定着度を表している。2つの図を比べると、2015年調査では地域差はあるものの、年齢差は全体として各地域とも同様の傾向を示している。一方、図3が示す2018年調査の結果からは、地域によって、また年齢によって異なりが見られる。つまり、大都市のほうが定着度が高く、また若年層のほうが定着度が高い。特にシャンハイは10代の話者の定着度が他市に比べて高いのが特徴である。

表10 両調査の地域による各年齢層の平均定着度

2015	10代	20代	30代	40代	50代
タンジョウ	2.32	2.39	2.27	2.19	2.14
サイナン	2.36	2.52	2.51	2.43	2.17
シャンハイ	2.38	2.75	2.64	2.57	2.29
2018	10代	20代	30代	40代	50代
タンジョウ	1.61	1.95	1.74	1.46	1.37
サイナン	1.98	2.14	1.99	1.83	1.45
シャンハイ	2.58	2.45	2.52	1.96	1.64

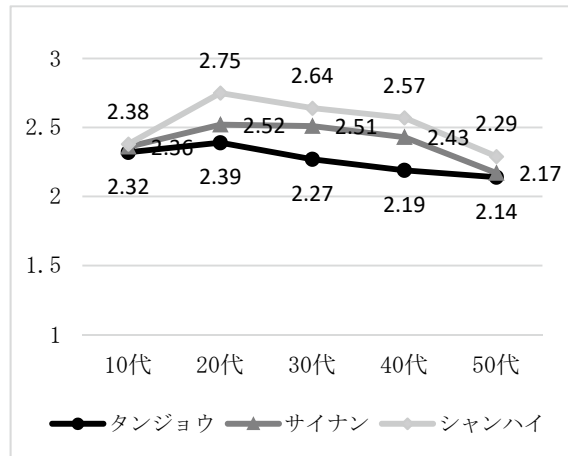


図2 2015年地域と年齢別による平均定着度

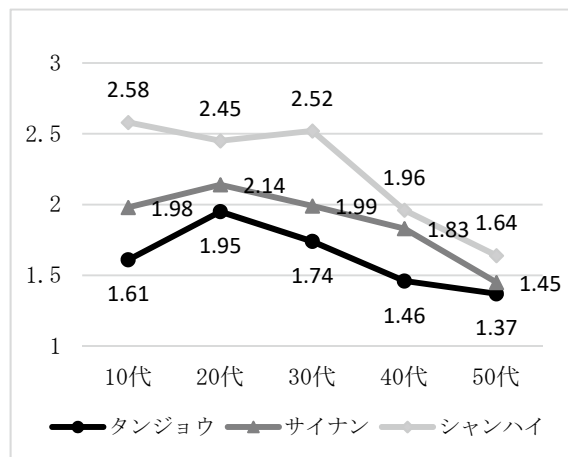


図3 2018年地域と年齢別による平均定着度

以上の調査結果をまとめると、調査回答者全体の平均得点は1.91点であり、45語の日源新詞は「未知」から「認知」の程度に定着していると思われる。また、回答者の社会的属性との関連を分析した結果、4つの属性のうち、地域と年齢属性が日源新詞の受容に影響していた。地域に関しては、都市の規模が大きいほど、日源新詞の平均定着度が高くなる傾向がみられた。年齢については、10代を除けば、20代をピークに年齢が増すにつれて平均定着度が下降する傾向にあった。また、地域と年齢の交互作用が見られ、大都市であるシャンハイの「10代～30代」グループの定着度が高かった。つまり、居住する都市の規模が大きく、若い人の方がより日源新詞を受容していると解釈できる。

### 3.2 調査語ごとの分析

本節は、調査語ごとの認知率（聞いたことがある割合）、理解率（意味がわかる割合）、使用率（使う割合）、そして平均定着度を算出して各語の定着のようすを確認し、加えて回答者の

社会的属性との関連を考察する。

以下の表11と図4は、45の調査語の認知率、理解率、使用率および平均定着度を表す。

表11 調査語の「認知率」「理解率」「使用率」と「平均定着度」

	認知率	理解率	使用率	平均定着度
暴走	94.7%	87.7%	48.0%	3.30
弁当	95.3%	87.6%	50.3%	3.33
弹幕	83.0%	74.7%	49.0%	3.07
卖点	84.3%	69.0%	36.3%	2.90
熟女	86.0%	68.0%	26.3%	2.80
打 call	83.0%	67.3%	41.0%	2.91
卡哇伊	79.3%	67.0%	36.7%	2.83
量販	80.3%	61.3%	25.3%	2.67
本命	73.3%	58.6%	30.3%	2.62
福袋	71.3%	56.0%	24.7%	2.52
天然呆	62.4%	48.7%	25.7%	2.37
爆买	61.3%	46.0%	15.7%	2.23
美肌	64.0%	45.3%	15.0%	2.24
援助交际	63.7%	44.0%	13.7%	2.21
中二病	52.4%	42.4%	18.7%	2.13
亚美蝶 / 雅蠃蝶	50.4%	41.7%	18.0%	2.10
都市传说	63.0%	40.3%	13.3%	2.17
大赏	55.0%	37.7%	13.7%	2.06
手作	45.7%	29.0%	13.7%	1.88
抖 S	38.0%	29.0%	12.3%	1.79
肉食女	44.0%	28.3%	12.0%	1.84
残念	43.3%	28.0%	13.3%	1.85
奥姆真理教	32.7%	22.7%	7.0%	1.62
女子力	32.1%	21.4%	10.7%	1.64
色气	32.7%	20.0%	7.3%	1.60
干物女	31.3%	19.6%	9.3%	1.60
现充	30.6%	18.6%	10.3%	1.60
BL	23.0%	18.3%	11.0%	1.52
花火大会	30.6%	17.3%	4.3%	1.52
人间失格	28.0%	16.7%	4.7%	1.49
玉子烧	24.3%	15.6%	6.3%	1.46
孤族	30.6%	14.6%	5.3%	1.51
ORZ/ 失意体前屈	20.0%	13.3%	7.3%	1.41
计划通	24.7%	12.4%	2.7%	1.40

工口	20.7%	11.7%	6.0%	1.38
亚撒西	19.0%	11.7%	5.0%	1.36
年功序列	17.0%	8.0%	2.3%	1.27
飞特	15.7%	8.0%	3.7%	1.27
Kuso	18.1%	7.4%	2.7%	1.28
KY	15.4%	7.4%	3.7%	1.26
乙男	14.6%	6.6%	3.3%	1.25
土下座	12.7%	5.7%	2.0%	1.20
箱推	15.0%	5.3%	1.3%	1.22
Wota 艺	8.3%	3.6%	2.3%	1.14
泥鰍内閣	8.7%	2.7%	0.7%	1.12
平均	44.0%	32.1%	14.9%	1.91

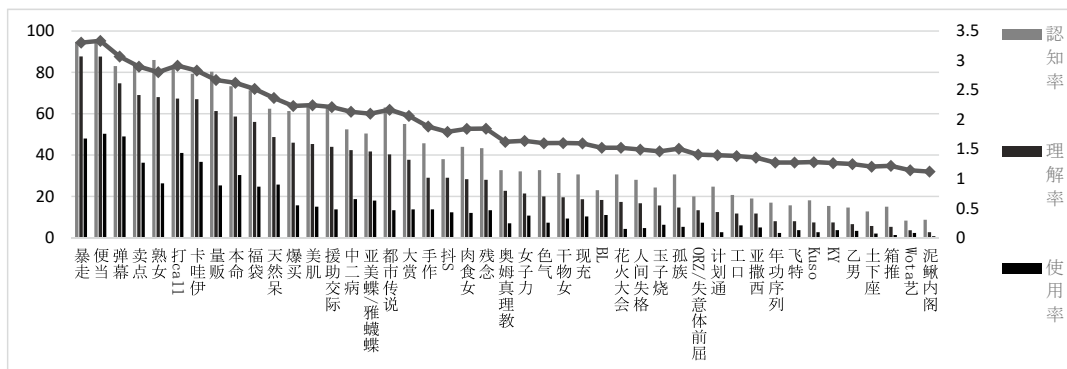


図4 調査語の認知率，理解率，使用率と平均定着度

表11と図4に示す傾向は，2015年の調査結果と同じく，認知率，理解率，使用率が下がるにつれ，平均定着度も下がるという傾向を示している。

張（2018）は日源新詞の定着度の判定基準とその妥当性について考察し，平均定着度による外来語の定着の度合いの判定基準を立てた。調査語の45語はその平均定着度の判定基準から以下のように分類できる。

表12 平均定着度による語彙の分布

平均定着度	判定基準	調査語
「3～4」 （「理解」～「使用」）	十分定着している	暴走 便当 弾幕
「2～3」 （「認知」～「理解」）	ある程度理解されていて，定着に向かっている	卖点 熟女 打call 卡哇伊 量販 本命 福袋 天然呆 爆买 美肌 援助交际 中二病 亚美蝶 / 雅蠟蝶 都市传说 大赏
「1～2」 （「未知」～「認知」）	知らない人が多く，これから定着していくかどうかは不明	手作 抖S 肉食女 残念 奥姆真理教 女子力 色气 干物女 现充 BL 花火大会 人间失格 玉子烧 孤族 ORZ/ 失意体前屈 计划通 工口 亚撒西 年功序列 飞特 Kuso KY 乙男 土下座 箱推 Wota 艺 泥鰍内閣

平均定着度が「3～4」の3語のうち，“暴走”（暴走）と“便当”（弁当）の2語は2000年以前に輸入され、すでに『現代汉语词典』（第7版）にも収録されている語である。もう1つの“弹幕”（弹幕）はインターネット等のメディア経由で急速に普及してきた語である。「2～3」の語は15語あり、その中には，“量販”（量販），“爆买”（爆買い），“打 call”（コール）など、マスコミや商業においての使用されているものが多い。これらは一時的な「流行りもの」の可能性もあり、定着に向かっていても十分安定してない状態にあると思われる。「1～2」の27語には，“奥姆真理教”（オウム真理教），“年功序列”（年功序列），“土下座”（土下座）のような日本の文化や社会現象に関連するものもあるが、大多数は“抖 S”（ド S），“BL”（BL），“エロ”（エロ）などのようなサブカルチャー関連の語彙である。これらは10～30代の若年層に集中的に受容され、社会全体には普及していない状態にある。

45語の調査語の定着の度合いが、回答者の属性と関連するかどうかを確認するためにカイ2乗検定を行った。表13にその結果を示す。語は平均定着度の降順に並べている。

表13 回答者の属性による平均定着度

	地域	性別	年齢	学歴	平均定着度
便当	***		**		3.33
暴走	*		†		3.30
弹幕	***		***	**	3.07
打 call	***	**	***	*	2.91
卖点	***		***	***	2.90
卡哇伊	***	†	***	**	2.83
熟女	**		***	**	2.80
量販	***		***	***	2.67
本命	***		***		2.62
福袋	***	**	***		2.52
天然呆	***		***	**	2.37
美肌	***	***	***	*	2.24
爆买	†				2.23
援助交际	***		***	**	2.21
都市传说	***				2.17
中二病	***		***	***	2.13
亚美蝶 / 雅蠃蝶	***	*	***	***	2.10
大赏	***		***		2.06
手作	***	†	***		1.88
残念	***		***		1.85
肉食女	***		***		1.84
抖 S	***		***	***	1.79
女子力	***	***	***	**	1.64
奥姆真理教	*	†	***	*	1.62
干物女	***	*	***	***	1.60

色気	***		**	†	1.60
現充	***		†		1.60
花火大会	***		***		1.52
BL	***	*	***	***	1.52
孤族	*		*		1.51
人間失格	***		*		1.49
玉子焼	***	**	***		1.46
ORZ/ 失意体前屈	***		***		1.41
計画通	***		*		1.40
工口	***	†	***	***	1.38
亚撒西	***		***		1.36
Kuso	**		***		1.28
飞特	***		*	*	1.27
年功序列	*		†		1.27
KY	***		***	**	1.26
乙男	**		**	**	1.25
箱推	*		**		1.22
土下座	*		**		1.20
Wota 艺	*		**		1.14
泥鰻内閣					1.12
(注: * = $p < .05$ ** = $p < .01$ *** = $p < .001$ † = $p < .10$ )					

下であらためて述べるが、全体的には、ほとんどの調査語に地域差と年齢差が見られた。また、約4分の1の語に性差が見られ、学歴差が見られた語は約半数だった<sup>6</sup>。

2015年の調査(張 2018)においては、平均定着度により分類した3つのグループ間に、回答者の社会的属性との関連の相違が見られた。具体的には、平均定着度が「理解」(3点)から「使用」(4点)の語は、属性によりばらつきが大きいグループと差があまり見られないグループに分かれている。「認知」(2点)から「理解」(3点)の語は各属性による差が大きく、不安定な状態にある。「未知」(1点)から「認知」(2点)の語は、全体的に定着度が低いため、一部の属性でのみ差が見られた。一方、今回の調査においては平均定着度によるグループ間に顕著な差は見られず、3グループともに地域差と年齢差が見られた。また、一部の語には性差と学歴による差も見られた。

各語の定着の度合いを回答者の属性別に見ると、以下のような傾向が見られた。

#### 〔地域〕

地域差に関しては、定着度が一番低い“泥鰻内閣”(どじょう内閣)を除いて、全ての調査語に地域差が見られた。その上、図5と6に示すように、各調査語の傾向が例外なく調査語全体の傾向と同じく、「タンジョウ」、「サイナン」、「シャンハイ」の順に、都市の規模が大きい

6 ここでは  $p < .10$  の場合も含めている。

ほど、平均定着度が上がる傾向にある。

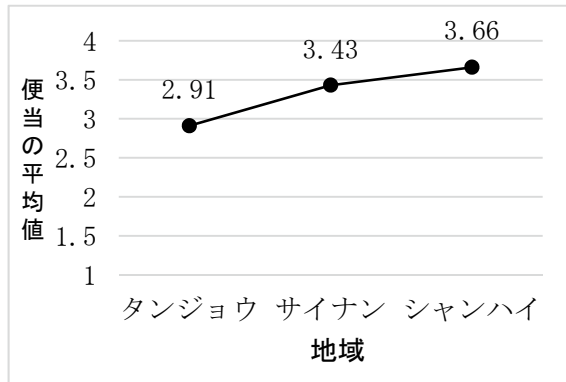


図5 “弁当”の地域差による平均定着度

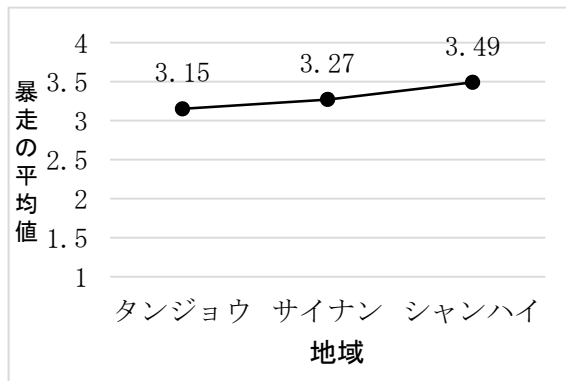


図6 “暴走”の地域差による平均定着度

#### 〔性別〕

調査回答者ごとの分析においては、平均定着度に性差が見られなかったが、各調査語の傾向を具体的に見ると、性差が見られる語が12語あり、調査語の約4分の1を占めている。そのうち、女性の定着度の方が有意に高い語が9語ある。“打call”（コール），“卡哇伊”（かわいい），“福袋”（福袋），“美肌”（美肌），“手作”（手作り），“女子力”（女子力），“干物女”（干物女），“BL”（BL），“玉子焼”（玉子焼）である。男性の方が有意に高かった語は“雅美蝶／雅蠟蝶”（やめて），“奥姆真理教”（オウム真理教），“工口”（エロ）である。これは、張（2018）の調査結果と同じく、「男女の関心の違いが反映されている」と考えられる。定着度が女性の方が高い語は“打call”（コール），“卡哇伊”（かわいい）のような「流行性」を感じる語や“福袋”（福袋），“美肌”（美肌），“手作”（手作り）などのような商売に類出する語である一方、男性で有意に高いのは性や社会問題に関する語である。

#### 〔年齢〕

年齢差は，“爆买”（爆買），“都市传说”（都市伝説），“泥鰌内阁”（どじょう内閣）の3語を除いて、残りの42語に見られた。表14に示す通り、42語の年齢差は大きく分けて2つのパター

ンが見られる。1つ目は図7と8に示すような「右肩下がりパターン」であり、さらに細分化すると、「卡哇伊」（かわいい）のような調査語全体の傾向と同く「10代を除けば、20代～30代をピークに年齢が増すにつれて平均定着度が下降する」パターンと“中二病”（中二病）のような10代から年齢が増すに連れて定着度が下がるパターンに分けられる。統計結果を見れば、このパターンに属する語は30代と40代の間に受容度の境目が見られた。つまり、今回の調査語は、「10代～30代」の人びとに集中的に受容されていると考えられる。もう1つは「右肩上がりパターン」で、年齢が上がるにつれて定着度が上がるパターンである。このパターンに属する調査語は“奥姆真理教”（オウム真理教）のみである。

語“奥姆真理教”（オウム真理教）の読秀コーパス<sup>7</sup>での初出年は1995年であり、その年に発生した地下鉄サリン事件がきっかけで中国に伝わってきた可能性が十分考えられる。図8に示す通り、この語は30代以上の世帯に集中的に受容され、10代～20代の受容度が比較的に低かった。地下鉄サリン事件は一過性の事件であり、オウム真理教自体もその後解散することに至り、24年後の現在では、語“奥姆真理教”（オウム真理教）が言語使用者の視野から失われつつある。したがって、その語は30代以上の世代、いわゆる事件当時の10代～30代の人びとに集中的に受容されていると考えられる。

表14 調査語の年齢による平均定着度のパターン

パターン		調査語
右肩下がり	10代がピーク（12語）	计划通 工口 乙男 色气 飞特 抖 S 中二病 KY 现充 亚撒西 干物女 BL
	20代～30代がピーク（32語）	暴走 便当 弹幕 卖点 熟女 打 call 卡哇伊 量贩 本命 福袋 天然呆 爆买 美肌 援助交际 亚美蝶 / 雅蠃蝶 都市传说 大赏 手作 肉食女 残念 女子力 花火大会 人间失格 王子烧 孤族 ORZ/ 失意体前屈 年功序列 Kuso 土下座 箱推 Wota 艺 泥鳅 内阁
右肩上がり	50代がピーク（1語）	奥姆真理教

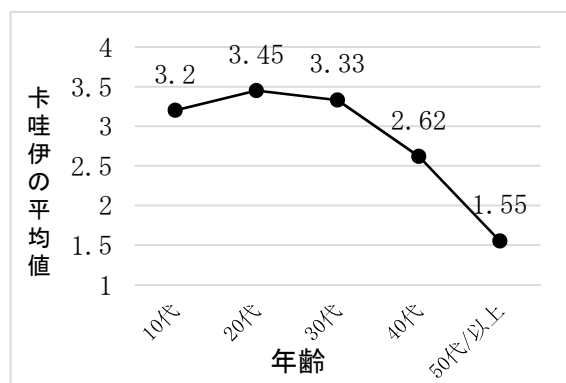


図7 “卡哇伊”の年齢差による平均定着度

7 “读秀”は、論文、図書、雑誌、新聞など膨大な全文データとデータの基本情報で構成される大型データベースサービスである。本稿は主に“读秀”の新聞データを利用する。各調査語を新聞データの枠組みで検索し、初出の記事の年代を確認した。

<http://www.duxiu.com> (20191109)



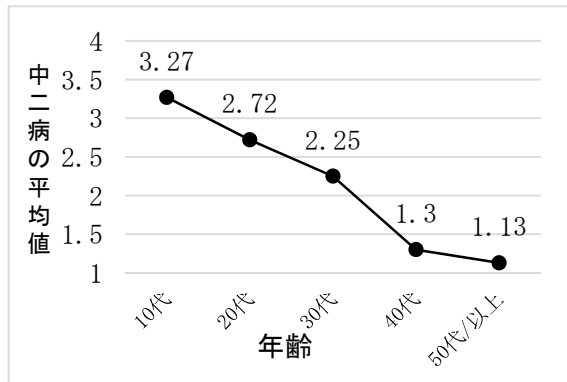


図8 “中二病”の年齢差による平均定着度

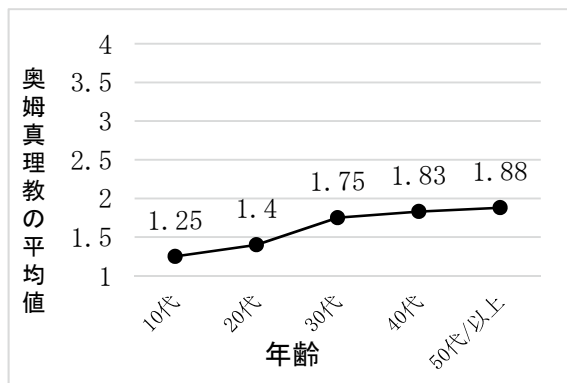


図9 “奥姆真理教”の年齢差による平均定着度

#### 〔学歴〕

調査回答者ごとの分析においては、平均定着度に学歴差は見られなかったが、調査語ごとの分析においては、学歴差が見られた語は21語ある。表15は各調査語の平均定着度の学歴差を表している。表に示すように、調査語の学歴差も2パターンに分けることができる。1つ目は「右肩下がり」の中学校の受容度が他のグループより高いパターンと、もう1つは「右肩上がり」の大学/院生の方の受容度が高いパターンの2つである。輸入時間から見れば、前者の語は輸入されてからの時間が短く、それに比べて、後者の語彙は輸入されてからの期間が長い語である。

表15 各調査語の平均定着度の学歴差

	学歴	平均定着度	輸入年	グループ間の差
弹幕	**	3.07	2011	大<院
打 call	*	2.91	2016	中>高
卖点	***	2.90	1991	中<大, 院 高<院
卡哇伊	**	2.83	2000	高, 大<院
熟女	**	2.83	2004	高<大

量販	***	2.80	1991	中<大, 院 高<大, 院
天然呆	**	2.67	2007	中>高, 大
美肌	*	2.24	1980	中<院
援助交际	**	2.37	1999	中<院 高<大, 院
中二病	***	2.24	2010	中>高, 大, 院 高>大 大<院
亚美蝶 / 雅蝶蝶	***	2.21	2005	中>高, 大 高<院 大<院
抖 S	***	1.79	2012	中>高, 大, 院
女子力	**	2.13	2011	中>高, 大
奥姆真理教	*	1.62	1995	高<大
干物女	***	1.60	2007	中>高, 大, 院
色気	†	2.10	2003	中>院
BL	***	1.52	2003	中>高, 大, 院
工口	***	1.38	2012	中>高, 大, 院
飞特	*	1.79	2003	なし
KY	**	1.64	2009	中>高, 大, 院
乙男	**	1.62	2009	中>高, 大

以上述べたように、45語の調査語の定着の度合いが、回答者の属性との関連を分析した。その結果、ほとんどの調査語に地域差が見られ、調査語全体の傾向と同じく、都市の規模が大きいほど、平均定着度が上がる傾向にある。性別に関しては、定着度が女性の方が高い語は「流行性」を感じる語や商売に類出する語である一方、男性で有意に高いのは性や社会問題に関する語である。年齢については、今回の調査語は、「10代～30代」に集中的に受容されている傾向にある。最後に学歴に関しては、中学校グループは新しい語に対しての受容度が高いのに対して、大学 / 院生の方は輸入されてからの期間が長い語に対して受容度が高いことがわかった。

#### 4. 2015年の第1回定着度調査との比較

2015年の調査では、日源新詞に関する唯一の専門書である『日源新詞研究』（2011）を使って調査語を抽出して定着度調査を行い、一定の結果を得た。本稿では、この調査結果の妥当性を確認するため、2018年調査で別ソースから抽出した異なる調査語で同様の調査を行い、2つの調査結果を比較した。その比較の結果から、日源新詞の社会内での受容の実態を把握する。

今回の調査結果を第1回の定着度調査と比べてみた結果、以下のような3つの違いが見られた。

##### ①平均定着度が2015年調査より低い

2015年の調査においては、調査語の35語の平均定着度は2.40であり、今回の平均定着度より

0.49高く、全体的には「認知」から「使用」という段階に定着していた。つまり、前回の調査語は全体的にはある程度理解されていて、定着に向かっている状態にあると解釈できる。それに対して、今回の調査語は「未知」から「認知」の段階にあり、前回より定着の度合いは1つ下の段階にあるという結果になった。

## ②2015年調査において確認された学歴の影響が見られない

前回の調査では、回答者の属性については、地域差、年齢差、学歴差、職業差<sup>8</sup>が見られた。今回の調査においても、地域と年齢については同じ傾向が見られた。一方、学歴に関しては、前は学歴が上がるにつれ、平均定着度も高くなる傾向にあったが、統計検定の結果からは今回は学歴差は検出できず、各学歴グループ間にも有意な結果は見られなかった。

また、「中学校/それ以下」あるいは「高校/高専」と回答した者たちは、現役の中学生・高校生グループと最終学歴が中学校・高校までの社会人グループの2つに分けることができる。表16に示すように、現役中高生の調査語の平均定着度は2.50、社会人は1.85で、現役中高生のほうが日源新詞の受容は進んでいる。この受容の度合いから見れば、2つのグループは同じ学歴レベルでも別の集団とみなすべきだと考えられる。そのため、最終学歴が中学校・高校までの社会人グループを除いて分析した結果、学歴に差が見られるようになったが、前回の学歴差の結果とは異なり、「中学校/それ以下」、「大学院」、「高校/高専」、「大学/短大」の順に、平均定着度が下がる傾向にある。HSD法による多重比較の結果、「中学校/それ以下」の平均定着度が、「大学/短大」( $p < .05$ )の平均定着度に対し、有意に高いことが認められた。つまり、前回の調査語は高学歴の人がより受容していたのに対して、今回の調査語は「中学校/それ以下」の回答者がより受容していると考えられる。

表16 現役の中学生・高校生と最終学歴が中学校・高校までの社会人の数

	学生 $N$	社会人 $N$
タンジョウ	20	10
サイナン	22	5
シャンハイ	20	14
合計	62	29
平均定着度	2.50	1.85

表17 学歴による平均定着度の分散分析の結果

学歴	$N$	平均値	標準偏差	$F$
中学校/それ以下	30	2.20	0.63	3.030*
高校/高専	32	1.94	0.56	
大学/短大	180	1.89	0.56	
大学院	29	2.04	0.46	

$p < .05$

8 今回の調査は前回と同様、職業は回答者に自由記入してもらったが、回答された職業はバラバラで、職業別の集団に分けるのが難しく、また分けたとしても等分散性が保証できないため、今回の分析から省くことにした。

### ③2018年調査では各年齢層の平均定着度の差が大きい

2015年の調査においては、HSD 法による多重比較の結果、20代 ( $p < .01$ ) と30代 ( $p < .05$ ) の平均定着度は50代及びそれ以上の平均定着度に対し、有意に高いことが認められた。一方、2018年の調査においては、10代の平均定着度は40代 ( $p < .01$ )、50代及びそれ以上 ( $p < .001$ )、20代は40代 ( $p < .001$ )、50代及びそれ以上 ( $p < .001$ )、30代は40代 ( $p < .01$ )、50代及びそれ以上 ( $p < .001$ )、40代は50代及びそれ以上 ( $p < .05$ ) の平均定着度に対し、有意に高いことが認められた。つまり、前回の調査にくらべて、今回の方が各年齢層の平均定着度の差が大きかった。

以下では、前調査との3つの違いが起こった原因とに着目して分析したい。

まずは平均定着度の低さであるが、これは今回の調査語が新しいものが多いことから生じたと考えられる。『日源新詞研究』(2011)をもとに調査語を抽出した前回の調査とは異なり、今回の調査語は、筆者が新語辞書、日本語由来の外来語に関する先行研究そしてインターネットなど各種のメディアから集めたもので、輸入されてからの時間はあまり経過していないものが多い。表18は両調査の調査語の輸入年と平均定着度を表している。2015年の調査語の35語の中には、読秀コーパスの検索で1978年以前の用例が検出された語が10語もあり、今回の語彙収集の判別基準(1978年以後に輸入される語)からは、新詞として扱うことができない語も含まれていた。残りの25語は1997年を区切りとして(1978～2017年の40年を均等に二分するため、その中間値の1997を選んだ)、それ以前に輸入された語が16語、それ以後に輸入された語が9語である。一方、2018年の調査語は、1997年以前のものが12語、またそれ以後のものが33語である。以上のことから、2018年の調査語のほうが、全体的には2015年の調査語より輸入されてからの期間が短いものが多いことがわかる。

表18 両調査の調査語の輸入年と平均定着度

2018年の調査	輸入年	平均定着度	2015年の調査	輸入年	平均定着度
美肌 (美肌)	1980	2.24	达人 (達人)	1978以前	3.24
年功序列 (年功序列)	1980	1.27	媒体 (媒体)	1931	3.44
便当 (弁当)	1983	3.33	料理 (料理)	1931	3.32
人间失格 (人間失格)	1985	1.49	败因 (敗因)	1931	1.97
花火大会 (花火大会)	1987	1.52	風呂 (風呂)	1936	1.22
福袋 (福袋)	1989	2.52	写真 (写真)	1958	3.33
大赏 (大賞)	1989	2.06	职场 (職場)	1959	3.38
卖点 (セールスポイント)	1991	2.90	运营 (運営)	1959	3.33
量販 (量販)	1991	2.67	封杀 (封殺)	1960	3.26
暴走 (暴走)	1992	3.30	中古车 (中古車)	1977	1.52
奥姆真理教 (オウム真理教)	1995	1.62	年功序列 (年功序列)	1980	1.29
亚撒西 (優しい)	1996	1.36	低迷 (低迷)	1981	3.02

残念（残念）	1998	1.85	中水（中水）	1981	1.34
援助交際（援助交際）	1999	2.21	民宿（民宿）	1982	2.33
都市传说（都市伝説）	1999	2.17	连霸（連覇）	1984	1.79
卡哇伊（かわいい）	2000	2.83	单品（单品）	1986	2.76
手作（手作り）	2003	1.88	舌祸（舌禍）	1987	1.64
色气（色気）	2003	1.60	熟年（熟年）	1987	1.55
BL（BL）	2003	1.52	完败（完敗）	1989	3.18
飞特（フリーター）	2003	1.27	人气（人気）	1990	3.46
Kuso（くそ）	2003	1.28	量贩店（量販店）	1991	2.80
熟女（熟女）	2004	2.80	人脉（人脈）	1992	3.44
亚美蝶 / 雅蠃蝶（やめて）	2005	2.10	居酒屋（居酒屋）	1992	2.16
玉子烧（卵焼き）	2005	1.46	买春（買春）	1992	2.13
ORZ / 失意体前屈（ORZ / 失意体前屈）	2006	1.41	少子化（少子化）	1994	1.37
天然呆（天然ボケ）	2007	2.37	绝赞（絶賛）	1996	2.15
干物女（干物女）	2007	1.60	年中无休（年中無休）	1998	2.60
爆买（爆買い）	2008	2.23	御宅族（御宅族）	1999	2.31
肉食女（肉食女）	2009	1.84	声优（声優）	1999	2.04
KY（KY）	2009	1.26	苦手（苦手）	2001	1.43
乙男（乙男）	2009	1.25	定番（定番）	2002	1.35
中二病（中二病）	2010	2.13	耽美（耽美）	2003	1.87
弹幕（弹幕）	2011	3.07	王道（王道）	2004	3.19
女子力（女子力）	2011	1.64	萌（萌え）	2006	3.44
孤族（孤族）	2011	1.51	乐胜（楽勝）	2010	1.29
泥鰍内阁（どじょう内閣）	2011	1.12			
抖 S（ド S）	2012	1.79			
现充（リア充）	2012	1.60			
工口（エロ）	2012	1.38			
本命（本命）	2014	2.62			
打 call（コール）	2016	2.91			
计划通（計画通り）	2016	1.40			
Wota 艺（オタ芸）	2016	1.14			
土下座（土下座）	なし	1.20			
箱推（箱推し）	なし	1.22			

輸入されてからの期間の長さと平均定着度の関係性を見出すために、1978年から2017年までの40年を10年ごとに区切り、各期間に輸入された語数とその平均定着度を算出した。表19と図10がその結果を表している。これらに示すように、1978年以前に輸入された語は輸入後の時間が一番長く、平均定着度も2.80点で一番高く、語彙全体が定着に向かっている状態にある。

1978年以後の日源新詞は1988～1997をピークに、輸入されてからの期間が短くなると平均定着度が低くなる傾向が見られる。“弹幕”（弹幕）（2011, 3.07）, “打 call”（コール）（2016, 2.91）のような輸入後の時間が短くても定着度が高い語がいくつか見られるが、それらは、マスコミの影響で急速に認識されるようになった語であるので、その他の日源新詞とは異なり、「流行性」が感じられるものである。外来語の定着の度合いに影響する要因は、（非）専門性など語の使用域や使用頻度など数多く存在しているが、上で検討したことからは、輸入後の期間の長さも平均定着度に影響する要因の1つと考えられる。

表19 各期間の輸入語数と平均定着度

2018年の調査	数（％）	平均定着度	2015年の調査	数（％）	平均定着度
			1978以前	10（28.6％）	2.80
1978～1987	5（11.1％）	1.97	1978～1987	8（22.9％）	1.97
1988～1997	7（15.6％）	2.35	1988～1997	8（22.9％）	2.59
1998～2007	15（33.3％）	1.89	1998～2007	8（22.9％）	2.28
2008～2017	18（40.0％）	1.74	2008～2017	1（2.9％）	1.29
合計	45（100％）	1.91	合計	35（100％）	2.40

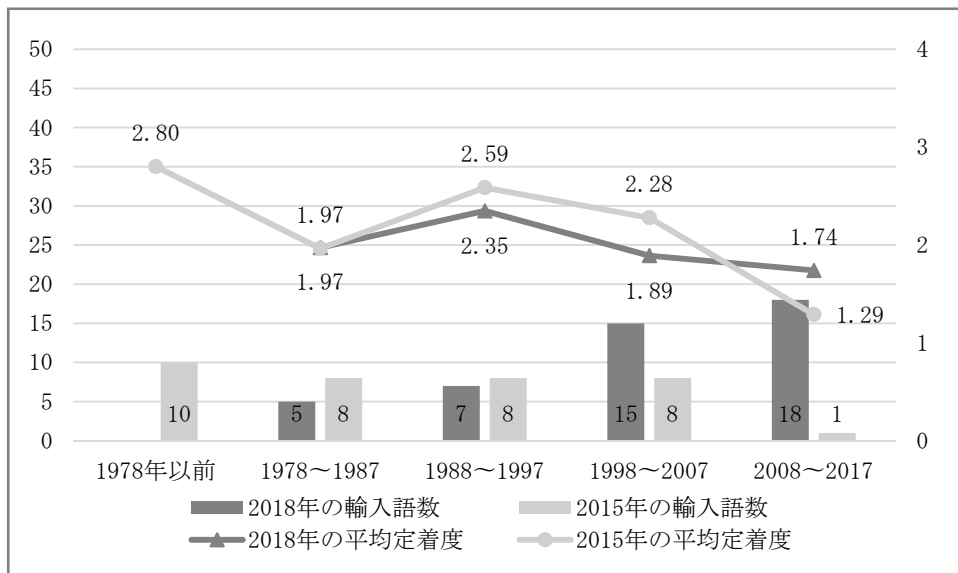


図10 両調査の各年代の輸入語数と平均定着度

次は学歴差が見られなかったことについてである。前述したように、2015年の定着度調査においては、学歴が上がるにつれ、平均定着度も高くなる傾向にあったのに対して、今回は学歴差が検出できず、各学歴のグループ間にも有意な結果が見られなかった。その理由も定着度の低さと同じく調査語の輸入後の期間が短いこと、そして等分散性が保たれていないことによると考えられる。

2018年の定着度調査の語彙は前回の調査より新しいため、学歴を問わず各グループの定着度

が低く、点数が一番高いグループの「中学校/それ以下」でも得点は2.07であり、「認知」(2点)から「理解」(3点)の段階にようやく含めることができる程度である。平均定着度が「認知」(2点)前後ということは、調査回答者は全体的には、それらの調査語に対して、見聞きしたことはあるが意味がよくわからない、あるいはわかりにくさを感じている状態にある。言い換えると、今回の調査語の大多数は特定の人々に使用されているだけで、社会全体にはまだ十分に広がっていないため、学歴という変数ではグループ間に差を検出することが難しいためと考えられる。

また、前回の調査と同じく、今回の調査においても、学歴に関しては各グループ間の等分散性が保証できず、学歴の影響が地域そして年齢属性の影響と連動したことも原因となり、学歴の差が出たり出なかったりしたのではないかと考えられる。当初は調査対象者の選定は地域、性別、年齢による層別抽出(3都市100名ずつ、10代、20代、30代、40代、50代以上の5つの世代各20人、男女同数)を行ったが、「20代」から「50代およびそれ以上」の回答者は学歴が大学以上(「大学/短大」および「大学院」)の人が大多数で、高校以下(「中学校/それ以下」および「高校/高専」)は少なかった。したがって、各グループにおいては、年齢の等分散性を保証すると同時に、学歴の等分散性も保証することが難しかった。また、表20に示しているように、「中学校/それ以下」の回答者が、タンジョウにはおらず、サイナンにいる「高校/高専」の人が全体の10%未満を示すなど、「大学/短大」を除いて、各地域に学歴グループが均等に分布しているわけではない。ということは、学歴の各グループ間には年齢そして地域の点では偏りが見られる。このため、学歴の各グループ間では等分散性が保証できず、学歴属性の分析結果に影響を与えたと考えられる。今回の調査において、点数が一番高いグループは「中学校/それ以下」であること、「大学/短大」の点数が比較的に低いことも、年齢差そして地域差の影響を受けた結果と考えられる。なぜなら、「中学校/それ以下」の回答者が、定着度が高い2都市に集中して分布しているので、平均定着度がより高くなり、「大学/短大」グループには、「20代」の回答者だけでなく、「40代」と「50代およびそれ以上」の受容度が低い回答者も含まれているため点数がより低くなったと解釈できる。

表20 地域と学歴のクロス表

		中学校/それ以下	高校/高専	大学/短大	大学院	合計
タンジョウ	N	0	30	65	5	100
	%	0.0%	30.0%	65.0%	5.0%	100.0%
サイナン	N	22	5	53	20	100
	%	22.0%	5.0%	53.0%	20.0%	100.0%
シャンハイ	N	13	21	62	4	100
	%	13.0%	21.0%	62.0%	4.0%	100.0%
合計	N	35	56	180	29	300
	%	11.7%	18.7%	60.0%	9.7%	100.0%

最後は、2018年調査で各年齢層の平均定着度の格差が大きかったことについてである。その原因は、繰り返し言及した調査語の輸入の期間が短いこと以外に、調査語にはサブカルチャー

関係の語が多く、これらの語彙は10代～30代の回答者に集中的に受容されているためと考えられる。

表21に示すように、2015年の調査語には、“萌”（萌え），“御宅族”（オタク），“声优”（声優），“耽美”（耽美）の4つのサブカルチャー関係の語があり、全調査語（35語）の11%だったのに対して、今回の調査では、“暴走”（暴走），“亚撒西”（優しい）など21語あり、調査語（45語）の半分近くを占めている。

表21 両調査のサブカルチャー関係の語彙

2015年の調査	2018年の調査	
萌（萌え）	暴走（暴走）	乙男（乙男）
御宅族（オタク）	亚撒西（優しい）	中二病（中二病）
声优（声優）	残念（残念）	弹幕（弹幕）
耽美（耽美）	卡哇伊（かわいい）	抖S（ドS）
	色気（色気）	现充（リア充）
	BL（BL）	工口（エロ）
	Kuso（くそ）	本命（本命）
	ORZ/ 失意体前屈（ORZ/ 失意体前屈）	打call（コール）
	天然呆（天然ボケ）	计划通（計画通り）
	干物女（干物女）	Wota 艺（オタ芸）
	箱推（箱推し）	

前回の調査分析から（張 2018）、サブカルチャー関係の語は、調査語全体に見られる年齢差の傾向（10代を除き、「20代～30代」をピークに年齢が上がるにつれて平均定着度が下がる）とは異なり、「10代の回答者の平均定着度が一番高く、年齢が上がるにつれ、平均定着度は下がる傾向」（p.94）を示す。また、尹（2012）は、“ACG 日源流行語”（ACG 日源流行語）を研究対象とする予備調査において、サブカルチャー関係の語彙は13～30才の青少年に集中的に受容されているという調査結果を示している。さらに、王（2017）は中国語における“动漫日源词”（アニメ関係の日源外来語）の最も重要な使用者は青少年で、彼らは“动漫日源词”の中国への流入を推進したと述べる。以上3つの調査結果から、これらの語彙は10代～30代の人に集中的に受容されていると言える。今回の調査語は、その半数近くがサブカルチャー関係の語彙であるため、10代～30代の回答者と40代以上の回答者の間の受容度の差が前回より大きくなったと考えられる。

以上では、今回の定着度調査と2015年調査との違い、そしてその相違が起こった原因に着目して分析した。まず平均定着度の低さは今回の調査語が新しいものが多いことから生じたと考えられる。また学歴差が見られなかったについては、調査語の輸入後の期間が短いこと、そして等分散性が保たれていないことによると考えられる。さらに2018年調査で各年齢層の平均定着度の格差が大きかったについては、輸入後の期間が短いこと以外に、今回の調査語にはサブカルチャー関係の語彙の割合が多く、またこれらの語彙が10代～30代の回答者に集中的に受容されているため年齢差が拡大したと考えられる。



## 5. おわりに

本稿では、調査対象の45の日源新詞の受容状況を知るために、2018年に中国の3都市での質問紙調査の結果を統計的手法で分析し、語彙の定着度と地域、年齢などの日源新詞使用者の社会的属性との関連から、日源新詞の受容状況を追求した。

分析の結果、45の調査語は全体としてある程度認知されているが、知名度の低い語がまだ数多く存在し、これから定着に至るかどうかは不明という段階にあることがわかった。また、回答者の社会的属性との関連を分析した結果、地域、年齢が日源新詞の受容に影響することがわかった。つまり、居住する都市の規模が大きく、若い人の方がより日源新詞を受容していると解釈できる。調査回答者のうちに、シャanghaiの10代～30代の回答者グループが、今回の定着度調査では日源新詞を一番受容しているグループであることがわかった。また、各語の定着度を回答者の属性との関連で分析した結果、その定着は回答者の各属性によりばらつきが見られた。

さらに、本稿は2018年の調査結果と2015年の調査結果と比較すると、①平均定着度が2015年調査より低い、②2015年調査において確認された学歴の影響が見られない、③2018年調査では各年齢層の平均定着度の差が大きい、の3つの違いが見られたが、それは調査語の輸入後の期間が短いことや調査語にはサブカルチャー関係の語が多いことなどの結果と考えられる。

## 参考文献

- 譙燕，徐一平，施建军編（2011）『日源新詞研究』学苑出版社
- 国立国語研究所（2004）『外来語に関する意識調査』国立国語研究所
- 国立国語研究所（2005）『外来語に関する意識調査Ⅱ』国立国語研究所
- 国立国語研究所（2006）『新「ことば」シリーズ19外来語と現代社会』国立印刷局
- 梁敏鎬（2007）「日本語と韓国語の外来語の受容意識－イメージ調査の分析」陣内正敬，田中牧郎，相澤正夫編（2012）『外来語研究の新展開』，pp. 148-167，おうふう
- 松田謙次郎（2018）「変異理論における一般化線型混合モデルの導入」計量国語学31巻6号 pp.402-416
- 彭広陸（2005）「中国語と外来語」『国文学 解釈と鑑賞』第70巻1号 至文堂
- 沈国威（1994）『近代日中語彙交流史』笠間書院
- 史有为（2000）『汉语外来词』商务印书馆
- 王源（2017）「“动漫日源词”传入中国及其对中文的影响」[M] 外交学院
- 谢静怡（2012）「日源外来词新词语特征」[M] 燕山大学
- 尹露（2012）「ACG时代背景下的青少年日源流行语研究－以“控”“的说”为例」[M] 上海外国语大学
- 張曉娜（2018）「中国語における日源新詞の受容－定着度調査を中心として－」『地域政策科学研究』第16号 pp.73-96
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室編（2016）『现代汉语词典』商务印书馆 第7版
- 读秀コーパス <http://www.duxiu.com> (20191109)